

鶏窓雑考

29 茂吉の「もつと本物を観玉へ」について

島田 幸典

独創ということは誰にでも望まれるものではないかも知れないが、その人その人に応じた、自分なりの努力と工夫とがやはりなければなるまい。見ることが先ず大切だが、見たものをどう現わすかということが課題である。

「主観的表現」

素材は何であってもいいのだが、見る眼、表現の言葉に不断の工夫と変化とが要求されるのである。習熟することとは一つの力量だが、その習熟をあえてふり捨てるだけの勇氣をもって、一回性の経験、一回性の言語として一首があるという方向に行くのが本当である。

「素材(Ⅱ)」

『短歌作者への助言』から引いた。いずれも昭和四十一(一九六六)年、佐藤佐太郎五十六歳のときの言葉である。「何を」より「どう」表現するかに重心を置いている。さらに既成の技術に「習熟する」という水準を超え、いかなる素材にたいしてもそのつど最善の表現を見つけたし、「一回性」の言葉によつて歌を作ることを説く。言わば経験と表現との一期一会の結びつきとして歌の言葉を掴みとるよう求めるのである。妥協のない、佐太郎らしい表現論であり、「私の文章も、助言とはいつでも実は自身のために問題を解決するという態度で書いたものであった」という本書の序の言葉が思いだされる。

◇

その佐太郎の「何を」をめぐる見解について、前回に引き続いて考えたい。『軽風』(昭和十七年刊。佐太郎の第一歌集にあたるが、刊行順としては『歩道』に続き二番め)の後記にこんな言葉がある。

「略」私は昭和二年八月二十日附で先生からいただいた端書を保存してゐる。「少々気が利過ぎてゐる○細かすぎる○しかし、歌つくりもいろいろの処を通過するゆゑ、気長にやり玉へ。○観方、もつと本物を観玉へ」といふ端書である。私は全くこの一葉を護符のごとくにして作歌を続けたといつても過言ではない。私は自らの才能を疑ひ、また心の動揺する毎に一葉にすがつた。

「先生」は齋藤茂吉である。懇切な助言だが、忌憚のない批評でもあり、同時にその端的な歌論でもある。

右の後記および「入門当時の思ひ出」(『齋藤茂吉研究』)によれば、大正十四(一九二五)年に佐太郎は雑誌「改造」の新聞広告で茂吉作品に触れたのを機に短歌に関心を抱き、十五年にアララギに入会した。年末の改元を経て、翌昭和二年の二月号より茂吉の選歌を受けるようになり、三月六日に麴町下六番町の発行所で面会を果たす。満年齢で茂吉四十四歳、佐太郎十七歳のことである。二十年後の昭和二十二年に、佐太郎は当時のことを次のように回想している。「二階に通るとそこに五六人の人が居て、皆相当の年輩であり、私はいまだ少年でこんな所に出て来て取り返しのつかぬ事をしてしまったやうな気がしきりにした。「略」二階に來られた先生は、私が漠然と想像してゐたよりは、ずつと若く細い縞のある洋服を着て居られ、時々舌を出して黒い口髭をなめるやうにされた」(「入門当時の思ひ出」)。若い新入会員の不安と緊張が伝わる。とともに、茂吉の姿が彷彿する。前年(大正十五年)の三月二十七日にアララギを率いてきた島木赤彦が病没し、茂吉は五月号から編集発行人、昭和二年四月には青山脳病院院長となった。また八月十一日には、昔からの歌友である古泉千樞が死んだ。孤独のなかで担うものばかり大きくまた重くなる。そんな状況のもとで茂吉は佐太郎に葉書を書いた。全集第三十四巻によれば、宛先は「神田、南神保町岩波書店内」(書簡

番号一九〇五)。初対面から半年近く経つてのものが、佐太郎の資質や作風について熟考したうえでの助言であろう。

とくに「観方、もつと本物を観玉へ」は一読して強い印象を残す。『短歌作者への助言』の「本物」では、この言葉のもつ意味について佐太郎の理解が示される。佐太郎は「本物」は「枝葉末節」ではなく「根幹」、あるいは「真髓」「中心」を意味し、見方について「ほしいままに主観的な解釈や修飾を加えないで、ありのままに見なければならぬ」ことと捉えた。歌が実際の経験を契機とする詠嘆に基づくにせよ、現実の一切が歌になるわけではなく、その中の「大切なもの」を掴みとらなければならない。だが何が「大切」か抽象的に説明することはできない。「その時その人によつてさまざま」だからである。「だから結局はその「人」に帰着するのだが、しかしその人の眼は努力と工夫によつて進歩することを忘れてはならない」。

現実のなかから何を詠うか、という問いは技術論によつて回答を与えがたい。それが「さまざま」だということは、ここに作家の自由と課題があり、各々の個性(たとえば佐太郎と近藤芳美の違い)の核心が見いだされることを示唆する。と同時にそれは最終的に作家その「人」が何を求め重んじるのか、という問題に繋がる。何が「大切」か、「本物」なのか。そうした自問が創作の起点になければならないが、先入観や他人の意見を借りて答えることのできない問いである。